

お元気ですか

発行所・(福)横浜市社会福祉協議会
障害者支援センター

〒231 横浜市中区桜木町1丁目1番地
-8482 横浜市健康福祉総合センター9階
TEL 045(681)1211・FAX 045(680)1550
http://www.yokohamashakyo.jp/siencenter/

編集発行人・森 和雄

2019 / 3

障害福祉の仕事へ 実習がきっかけ 港北区障害者地域活動ホーム ともだちの丘

昨年六月、港北区障害者地域活動ホームとともだちの丘に、一人の実習生が来た。洗足こども短期大学幼児教育保育科の秋葉瑠衣さんだ。保育士として保育園で働くことをめざしていた。資格取得に必要な施設実習を行うために、先生の勧めでともだちの丘に。



皆さんとボールペン組立の作業をしている秋葉さん(中央右)

「障害児保育の授業は受けていたが、障害のある方と関わるのは初めてでした。施設は暗いかなというイメージも少しあったが、皆さんとても明るくて驚きました。また、訓練会や一時ケアを通し

て、多様な障害のお子さんに関われました。職員が保護者の悩みを親身に聞いたり、子供の成長を一緒に喜ぶ姿を見て、自分も障害のある方の現場で保育士として働きたいと思いました」と言う。

「活動ホームは様々な方が利用される。その様子や生活を目のあたりにして、その人たちが何を感じているのか、職員などがどの様に向き合っているのかを、秋葉さんはよく考察してくれていた。今回のことがきっかけで、障害福祉の道に進んでくれることは、職員にとっても良いモチベーションになった。利用者も、実習生が来ることを非常に喜んでいました」とお二人は語る。

秋葉さんは、実習後もボランティアとして今もともだちの丘で活動を続けている。

(横浜市グループホーム
連絡会入居者部会
永田 孝)

全十一日間の実習。秋葉さんはこの実習をきっかけに、「療育センター」という障害福祉の道に進むことに決めた。秋葉さんはどんな体験をし、何を感じたのか。

実習の後、秋葉さんは早速、障害児分野の先生を訪ね、保育士として障害児に関われる仕事にはどの様なものがあるかを相談した。

「活動ホームは様々な方が利用される。その様子や生活を目のあたりにして、その人たちが何を感じているのか、職員などがどの様に向き合っているのかを、秋葉さんはよく考察してくれていた。今回のことがきっかけで、障害福祉の道に進んでくれることは、職員にとっても良いモチベーションになった。利用者も、実習生が来ることを非常に喜んでいました」とお二人は語る。

差別をなくすにはどうしたらよいのか。私はちよつとした気づかいや、親切な心が大切だと考える。それから協力する人がかかえる問題を解決することができると思う。そのために法のことを知り、一人一人に差別についてもっと考えてもらいたい。そして、障害のある人たちが、安心して生活できるような生活になれば良いと思う。

望遠鏡

差別解消法が施行されて三年がたったが、私は障害者差別調整委員会や、差別解消支援地域協議会をやっている、日頃から差別についてよく考えている。知り合いから、差別をうけた話や、会議で差別の事例を読むと、多くのいろいろな差別がいまだに起きています。聞くたびに私は悲しくなる。法があっても、まだまだ差別はなくなっていないと感じる。

子どもの力を信じて さつき会幼児保育部の活動



朝の会

地域訓練会・さつき会幼児保育部（以下、さつき会・現会員は十二人）は、毎週二回、磯子区障害者地域活動ホームで活動している。
おはようございます
一日の活動は朝十時の「おはようの歌」で始まる。一人ずつ名前を呼ばれると大きな声で「はい」と返事をする子、自分で名前を言いたがる子、笑顔で応える子、半泣きの子、いろいろな子どもたちがいる。

一方、子どもたちはお母さんとは離れ、マット運動をスタート。椅子に座って順番待ち。名前を呼ばれたら、マットでゴロゴロ。うまくできなくても、諦めず一歩ずつ前進。保育ボランティアさんからは「頑張れ！上手！カッコいい！」と拍手が沸き起こる。最後は、ちょっと得意顔でポーズを決めて終了。参加しているお母さんから「最初の頃、母子分離は不安だった。

でも、子どもは親から離れると意外としつかりして、いつもの子どもとは違う一面を見ることができた。母子分離の時間は親子で頑張る時間。この時間があるから私も息子も成長できたと思う」とのお話を聞いた。
十二時四十五分、母子分離終了。別室から戻ってくるお母さんを子どもたちは今日一番の笑顔で迎える。
それぞれの想い
お母さんにさつき会に入ってよかったことを尋ねてみた。「自宅にいと親子だけの狭い関係になってしま

うまくできなくても、諦めず一歩ずつ前進。保育ボランティアさんからは「頑張れ！上手！カッコいい！」と拍手が沸き起こる。最後は、ちょっと得意顔でポーズを決めて終了。参加しているお母さんから「最初の頃、母子分離は不安だった。

うまくできなくても、諦めず一歩ずつ前進。保育ボランティアさんからは「頑張れ！上手！カッコいい！」と拍手が沸き起こる。最後は、ちょっと得意顔でポーズを決めて終了。参加しているお母さんから「最初の頃、母子分離は不安だった。



お弁当の時間

さつき会のプログラム

10:00	～ 朝の会
10:35	～ 自由遊び・課題遊び
11:30	～ お弁当
12:20	～ 自由遊び
13:00	～ 親子活動・帰りの会
13:30	終了

いることは、まずはケガのないように。あとは、子どもの力を信じて接すること。続けることで、子どもたちは必ず成長する。その小さな変化を見つけることが自分たちの励みになる」と語る。
たくさんさんの人の関わりの中で、仲間を作り、子どもたちの歩調に合わせて、その成長を見守るさつき会。この貴重な活動をこれからも大切にしたい。

渡邊さんの夢は「近鉄特急に名古屋から乗ってみたい」とこと「JR西日本の新快速で、大阪、大阪城公園間に行きたい」ことだそう。



お気に入りの電車の写真と一緒に！！

●氷見線「忍者ハットリ君」の電車に感動！
月刊「鉄道ファン」をトロな電車が一番印象に必ず購入しているという残ったそう。そして、北海道のいろいろな電車に乗って、雄大な景色を見ることが現在の夢だ。
お小遣いをこつこつと貯め、念願の「青春18切符」を購入。この年末年始の休暇期間中、5回の日帰り旅行を実現した。行先は、会津、名古屋、静岡方面。会津鉄道のレ

ほくのわたしのすきなこと
enjoy your life

地域作業所
ミコモカンパニー(旭区)
寛昭一郎さん
渡邊雄作さん

●青春18切符で素敵な旅をしました！
小学生の頃、親戚の家で見たブルートレインの写真がきっかけに、電車が大好きになったという寛さん。

第七回 災害シンポジウム 「防災を切り口にした 「コミュニティづくり・情報の保障」

一月二十二日、市内障害関係団体との共催により、「災害シンポジウム」が開催された。参加者は地域の方を含む約八十名、東日本大震災から八年、被災地から学び、今後の横浜の取り組みについて考えた。

■被災地支援を通して 「八幡さん」

阪神淡路大震災をきっかけに設立された「特定非営利活動法人ゆめ風基金」事務局長の八幡さんは、各被災



災害時に備えた地域での取り組みを語る

また八幡さんは、日頃から事前準備をしておくことが重要と話す。「例えば、①避難所の工夫（通路の確保、授乳室や更衣室の確保）、②備蓄品の工夫（紙

おむつ、ミルクなど）、③関係機関、専門機関との連携（外国人への配慮、医療面でのアドバース）、④当事者との確認（どのような支援が必要か話し合っておく）など。そのため

段から参加できる防災訓練の工夫が大切になる」と言う。「コミュニティの強い町が福祉にも防災にも強い。防災を切り口にしたコミュニティづくりを」と締めくくった。

■横浜では・・・ 川島第四町内会 アンケート取り組み

保土ヶ谷区川島第四町内会には高齢、障害

事業所が六施設ある。大規模災害に備え、地域と事業所が一体になって平時からの取り組みを進めてきた。その中の一つが福祉施設へのアンケートだ（聞き取り項目は表参照）。この聞き取りの中で、被災時にできること、

支援してほしいことを出し合い、それをもとに話し合いを進めている。

町内会長の二瓶さん、防災担当の新井さん、民生委員の田代さんは「福祉施設があっても、どのような方が利用しているのか、どういった施設なのか、地域の人たちには見えない。また、以前から、町内で障害がある方を見かけて支援したいと思っても、どうして良いか分からないという住民からの声があった。そこで聞き取りを行った。今後は地域の企業ともつながっていきたい」と語る。

- 各事業所へのアンケート項目 (表)
- ①施設概要
 - ②災害時町内会へ望むこと
 - ③災害時地域へ望むこと
 - ④災害時施設としてできること
 - ⑤災害時他施設へできること

防災訓練に参加して 「廣瀬さん」

聴覚障害児者と家族の会「ときわ虹の会」代表の廣瀬さんは、障害のある子を持つ親の立場として、保土ヶ谷区自立支援協議会防災部に企画している。

昨年九月に実施された市総合防災訓練にも参加し、避難所で必要な配慮について「被災後の避難所では、混乱状態になると想定される。そのなかでどのように正確な情報の保障がされるかは非常に重要だ」と語る。

けでなく、避難所にいる誰にとっても分かりやすくなる。スペースを含め、必要な支援が最初から避難所に盛り込まれていれば、みんなが使える場所になる。そういった考え方が定着していくと良い。また、障害があっても避難所のお手伝いができる人は多い。行政、地域、当事者がみんな課題を出しあう、力を出しあうような関係性ができていけば」と話した。

今後も本人、家族が地域で安心して暮らしていくために、災害時への備えを発信し続けていきたい。

災害シンポジウム
障害者支援をとおして被災地の現状と課題を知る
～災害時に備えた地域での取り組み～

主催：横浜市障害者地域活動ホーム連絡会、横浜市障害者地域作業所連絡会、横浜市グループホーム連絡会、セイブティーネットプロジェクト横浜

協力：TEAM 3事務局

主な内容

第1部 被災地支援から見えてきたこと
特定非営利活動法人 ゆめ風基金
事務局長 八幡隆司 氏

第2部 保土ヶ谷区での取り組みについて
(1) 川島第四町内会の取り組みについて
(2) 保土ヶ谷区自立支援協議会
防災部の取り組みについて

・地域から：川島第四町内会
会長 二瓶喜雄 氏
防災担当 新井好美子 氏
民生委員 田代君会 氏

・家族から：聴覚障害児者と家族の会
ときわ虹の会 代表 廣瀬宗史 氏

・支援者から：NPO法人きてん
ほどがや希望の家 早坂信一 氏
所長

・行政から：横浜市総務局危機管理室
緊急対策課 担当係長 杉村俊輔 氏

**現状の課題に具体的な施策を
「重心生徒の進路状況に係る
連絡会議」開催**

重症心身障害(以下、**重心**)のある生徒の進路先確保はますます厳しさを増している。一月十六日、第五回目の標記連絡会議が開催された。教育、家族、福祉、行政各分野から二十七名が参加した。**現状と課題**、**運営面や社会資源の地域偏在**、**冒頭**、**市立東俣野特別支援学校・森田氏**から、**重心の生徒の進路**

状況は今年も来年以降も、変わらず選択肢が限られ、厳しい状況である事が報告された。進路対策研究会委員長の市立上菅田特別支援学校・相田氏は、今までの第一回〜四回で出された課題を別表1の通り整理し、次のように語った。

「まずは、運営、特に財政面について。例えば、利用者の定期通

別表1

第1回～第4回
「重心生徒の進路状況に係る連絡会議」
において出た課題

課題① 事業所経営の不安定
→提案：加算制度の創設

課題② 重症心身障害児者、医療ケアに対応可能な送迎のむずかしさなど

課題③ 人材(看護師含む)確保、専門性の育成

課題④ 高齢化・障害の重度化への対応

課題⑤ 障害の多様化への対応
→提案：訪問看護を通所先へ派遣可能にすれば、様々な事業所で医療ケアが必要な生徒を受け入れることができる。

課題⑥ 社会資源の地域偏在

院や入院などによる収容面での不安定さが否めない。そこを補う加算が必要ではないか。また重心の卒業生を受け入れている事業所が地域により偏りがある。今後の卒業予定者数と照らし合わせると西部方面は比較的受け入れがあるが、他の地域、北部・南部は大変厳しい状況。

看護師等専門職の配置も困難な状況にあり、例えば訪問看護を通所先へ導入できるようにするなど、抜本的な制度見直しも必要ではないか」

ミニ多機能拠点も

横浜重心グループ連絡会(ばざばネット)会長の下山氏は「卒業後の進路の心配、家族の負担が大きい状況は変わらない。過去四年間、当会議で話し合いを重ねてきたがこのまま続くのか。横浜市が責任を持って日中活動の場を整備してほし

い。例えば『ミニ多機能拠点』を第三期障害者プラン六か所に加え、社会資源が偏在している地域に設置するなど検討してほしい」と訴える。

保護者も発信し、できる事をもにしていく
同会代表の西村氏も「青葉区在住の保護者を中心に『未来の樹あおば』を発足した。卒業後も続く暮らしについて保護者にできることは何かを考え、行政への要望書提出や事業所との意見交換などをしてきた。今後も法人の皆さんとともに、保護者からも発信し、協力者や支持者を増やし活動をしていきたい」と現状打開のための取り組みを語る。

施策推進協議会へ

重心の方を受け入れている施設は、その規模に関係なく、看護師などの人員体制や広い土地・施設環境の整備

が必要で、運営の不安定さもあり、資源の地域偏在をすすめる結果にもつながっている。これらの課題解決について、行政が方針をたいて進めてほしいという意見があいついだ。

横浜共生会の萩原氏は「課題は民間の法人努力だけでは解消できない。受け入れ可能な法人を増やすための方策を打つなど、資料に基づき行政が課題や提案に向き合ってほしい」と訴える。

また「重心の方は区レベルでは少人数のため、ブロックレベルで社会資源の整備を考えるといくことも必要。横浜市自立支援協議会ブロック別検討会で検討し、施策推進協議会で課題を協議していくシステムが必要ではないか。また、小規模でも重心の方を受け入れたと考える事業所に対し、そこをサポートするコンサルタント機能

があると良い。多機能型拠点などが地域へのノウハウを伝える仕組みがあれば」という提案もあった。

**重心施策を推進する
具体的な検討を**
相田委員長は、最後に「学校では公共心や社会参加の力を大切にしている。今の状態では、学校時代にその力を身につけても、力を発揮する場がない、となりがねない。本日の意見として終わるのではなく、具体的方策として次につながっていく」とまとめた。

※「重心生徒の進路状況に係る連絡会議」は、重心生徒の進路状況に関する現状と課題に関係者で共有し、卒業後のより良い進路対策を検討することを目的に、進路対策研究会・横浜市社会福祉協議会障害者支援センターの共催で実施している。平成二十六年度に発足し、今回が第五回目の開催となる。

障害のある人に寄り添う

障害者後見的支援制度

後見的支援制度で

は、将来の暮らしを一
緒に考えていくために、
登録者に寄り添うこと
を大切にしている。そ
こで、昨年十二月二十
一日、後見的支援室の
スタッフ向け研修を開
催し、当事者からお話
を伺った(参加者百名)。

相談の手前に

小野和佳さん(身体
障害)は、就職にあたり、
必要な自動車運転免許
の取得が困難で、内定
を辞退した経験がある。
「今思えば、どうすれば



自立生活センター自立の魂で
当事者スタッフとして働く小野さん

「今思えば、どうすれば
いいか」と悩んで、相談
に来た。だから、相
談にきてくれれば
ば応えるという
体制はハードル
が高い。役所に
行く、一歩手前
に、相談できる
人がいる、必要
な情報を得られ
るといった初め

免許を取得できるか、
誰かに相談して、工夫
できることもあったの
ではないかと思う。で
も、その時は自分で相
談先を探したり、役所
へ行く発想はなく、家
族にしか相談しなかつ
た」と振り返る。そし
て「プライベートな内
容を初めて会う人に話
すことは精神的に大き
な負担。どこに相談し
たらよいかもわからな
い。本当に困っている
時は、自分で動いて相
談に行くこと自体難し
いと思う。だから、相

の一步の支援が必要だ
と思う」と語る。

一人の人間として

十年以上、一人暮ら
しをしている下地亜莉
栖さん(発達障害)。
一人暮らしの経験から
「支援者の話し方に
よっては、自分の気持
ちを伝えられないこと
もあると思う。子ども
に対して話すような言
い方や上目線の言い方
をされたら、誰もが嫌
だと思う。対等に話を
してほしい」と語る。



発達障害の当事者会を
運営する下地さん

まっている人も
いるように思う。
私は入所施設
の経験があり、
職員が私の洋服
を購入していた
ので、自分のサ
イズがわからな
かった。でも、
経験して、覚えていく
こともできる。また、
私たちは、必要以上に
規則正しい生活を求め
られているように思っ
てもある。私たちの
求める生活は皆さんと
一緒で、お話ししたよ
うな私たちの気持ちも理
解してほしいし、受け
止めてもらいたい」と
言う。

寄り添う時には

小野さんは「支援者
の中には障害者だから、
いろんなことがわから
ない、と決めつけてし

また、下地さんは「寄
り添うとは、その人の
心までみていくこと。
自分が困った時、どの
ような態度で接しても
らいたいか、話を聴い
てもらいたいかを想像
しながら、支援にあ
たってほしい」と今後
の期待を述べた。



野菜作りから 地域交流へ 〜スコップ上飯 田の取り組み〜 (泉区)

泉区にあるスコップ
は農作業や受注作業を
行う作業所だ。その一
つのスコップ上飯田は
畑に囲まれた、のどか
な場所にある。
ほぼ毎日、二か所の
保育園に野菜を届ける
ようになって十年目。
保育園に向かう皆さん
はとても楽しそうだ。
「保育園の先生に親切
に対応してもらえ
ることが嬉しい」と話すメ
ンバーさん。この日も
多くの野菜を運び込
み、先生方や栄養士さ
んから「お疲れさま
です」と感謝の言葉をも
らった。

野菜を分けてもらっ
た、野菜を育てるコッ
を教えてもらうことも
あるという。「台風の
日も、雪の日も、保
育園の子どもたちに美味
しい野菜を届けるの
は、大変だけど楽しい」
と話してくれるメン
バーさんもある。「ポ
スティングの仕事もし
ているが、地域の方に
声を掛けてもらえるこ
とが増えました。農家
さんとの交流が地域と
の繋がりになってい
ると感じます」と話す森
所長。
地産地消をモットー
にしているからこそ、
地域との繋がりがより
大切なのだと感じた。
これからもおいしい野
菜を届けてほしい。



新鮮な野菜をお届けします！

(左) 保育園の調理室へ
笑顔で納品します。

あゆみ荘 だより

◆「障がいのある子と そのご家族の幸せオー ラ写真展」を開催

横浜あゆみ荘では、昨年十一月十一日(日)から十二月九日(日)まで、フォトグラフィア後藤京子さんの「障がいのある子とそのご家族の幸せオーラ写真展」を開催しました。



親子の笑顔あふれる
後藤さんの写真

「愛されるために生まれてきた子供たちの『命』を撮っているなど

いつも思うんですね。障がいがあってもなくても、生きていくことの素晴らしさを、写真から感じていただけたらと思います。これからも、その想いを語っておられます。

来場者からは「とても素敵な写真で元気をもらいました」「ご家族の我が子への想いに涙が止まりませんでした」など心温まるメッセージが寄せられました。

◆三十四年間あゆみ荘の清掃ありがとう！

一葉徹さん(六十五)は、横浜市知的障害者育成会に雇用され、あゆみ荘開所時から三十四年間清掃業務を務め、三月三十一日で定年退職を迎えます。



一葉さん、34年間
お疲れさまでした

いつも丁寧な清掃でお客様に大変喜んでい

いただきました。長年ありがとうございました。○「みんなで楽しむ！カラオケ教室」大好きな曲を上手に歌って自慢しよう」を開催

十一月十七日(土)・十八日(日)の二日間、「みんなで楽しむ！カラオケ教室」大好きな曲を上手に歌って自慢しよう」を開催しました。講師には、日本アマチュア歌謡連盟認定講師をお迎えし、参加者一人一人の障害に合わせた技術的指導を交え、皆さんがそれぞれの持ち歌をレベルアップさせることを目指し



専門講師による技術的指導風景

てアドバイスがありました。



定員超え“大人気”のカラオケ教室

この企画は毎回大人気で、今回も定員を大幅に超える応募者の中から抽選で参加者が決定しました。幸運な皆さんは、笑顔の輪と拍手喝采の中で大いに盛り上がりました。

支援センターだより

「感謝の集い」開催

「平成三十一年感謝の集い」が、二月二日(土)、横浜ラポールにおいて開催された。

永年にわたり関係団体に物心両面からご支

援・ご協力をいただいている方々へ感謝の意を表し、交流を深めることを目的に開催している。障害者支援センターの主催。

当日は、受賞者・来賓など約百五十名が参加、森センター長より感謝状と記念品を贈呈した。受賞者代表の中嶋武子様と砂川弘子様のお二人から、活動を始めたくっかけや多くの方に支えられこま

めで活動を継続できたこと、温かい気持ち・感謝の気持ちをもって今後も続けていきたいなどのご挨拶をいただいた。

また、アトラクションでは、「NPO法人活動ホームいずみ」のフラダンスと「カズーマンドラムアカデミー」のバンド演奏をご披露いただき、会場を盛り上げた。

式典終了後は、懇親会に移り、参加者が交流を深めた。

「感謝の集い」受賞者

- 清水真由美様、中村溥子様、村野令子様、中谷茂子様、菊池榮子様、古川美和子様、石井房枝様、坂野美恵子様、高木千賀子様、中村まつ江様、鈴木幸子様、木村久美子様、鈴木智子様、奥西宏子様、中嶋武子様、橋口ひで子様、千葉忠男様、岸愛子様、羽尾栄子様、泉敏子様、延岡晃吉様、岩田喜代司様、飯塚京子様、佐野千香様、高橋久子様、松下記子様、富塚和子様、太田早苗様、吉田愛美様、中村明子様、本多奉子様、森妃紗子様、後藤篤子様、吉崎悦子様、荒井莉美香様、唐澤真紀様、渡辺恵美様、原田晴美様、全日本自動車産業労働組合総連合会神奈川地方協議会様、横浜つづきワイズメン&ウィメンズクラブ様、室津滋樹様、宮上信之様、砂川弘子様、張替巳代子様、伊波洋之助様

(順不同)